# この十年・これからの十年

二七回生　萩原直大

ある日突然、柿崎さんより自宅に電話があり、千里第二小学校の東京での同窓会へお誘いを受けました。それまで、柿崎さんのお名前もこの同窓会の存在も全く知りませんでした。その時はまだ、「千里山会」の名前も会誌もなく、確か翌年からその双方が始まったと記憶しております。

以来、総会も会誌も一度も途切れることなく続いてきたのは、柿崎さんをはじめ幹事の皆様、会誌編纂に携われてきた方々のご努力と会員の皆様の千里山へ対する熱い想いの賜だと思います。この会誌が第十号であることは、十年以上歳月が流れたことになります。

よく、「十年ひと昔」といいますが、私の人生を記憶に残る四歳ぐらいから六四歳の今まで十年刻みに分けてみると、第一期（四歳から十三歳まで）が幼稚園・小学校時代に当り、もっとも千里山の自然に親しんだ時期であります。第二期（十四歳から二三歳）は、学生時代を経て就職し社会に巣立っていった時期です。第三期は、結婚し親になった時期であり、今は第六期（五四歳から六三歳）が終わり、第七期へ移行中というところでしょうか。私の知る諸先輩を見ていると、六〇～六二歳の頃に亡くなったり、大病を患われている方が多く、人世の第一関門だと感じております。とりあえず突破できたかなと思っております。我々世代以上の男性にとっては、転職が当たり前の今の若い人と異なり、就職・定年は結婚同様人世の大きな節目であり、私にとっての定年は千里山会の歩みと重なります。そのようなこともあり、この記念すべき第十号に標題のタイトルで一文を載せていただきたいと思いました。私自身のこの十年を振り返り、それを元にこれからのまず十年をいかに過ごすか、いかにすれば千里山会の諸先輩のような元気溌剌とした将来が演出できるのか考えてみたいと思いました。

長生きできるかどうかは結果論です。第一の人世ではよく会社の諸先輩から「所詮、物事全て結果だ」といわれました。私自身も仕事の面ではそう思いますが、人世となると必ずしもそうは思いません。むしろ結果（死）などどうでもよく、その結果に至るまでの日々の

暮らしをどう過ごすか、どのように思って暮らすかの方が大事ではないのかと思います。

## この十年

### 定年

私の育った環境は、土木の世界とは全く無縁なものでした。しかし浪人中に見たテレビの黒部第四ダム建設シーンや京都の予備校に通学する行き帰りの車窓に広がる新幹線・名神高速道路建設工事風景を見て、すっかり土木の世界に魅了されてしまいました。千里山の野山を駆け巡った第一期時代が大きく影響していたのかもしれません。その千里山は小さな子供が駆け巡るのに丁度いい程度の自然だったことも幸いしたのかも知れません。土木技師として建設会社に就職し、天職と思ったことが何度もあります。比較的大規模な工事に従事できたことも幸いでした。しかし、それだけに四年前に定年を迎え、その後も関連会社で働いていますが、土木技師としての勤めではない分淋しさもあります。

### 別れと誕生

この十年で身内，元上司・同僚，幼馴染の何人かが亡くなりました。歳を考えると当たり前のことでしょうが。九三年から〇四年の十二年間の間に、義母・父・義父・母が亡くなりました。母は父との結婚で東京から大阪に嫁ぎましたが、昭和十七年に大阪市内より千里山に移り、以来、平成七年までの五〇年以上を千里山で暮らしました。その間、大森さんや片山さんを始め、多くの千里山の方と親しくしていただき、「千里山人」の資格を十分に有していたと思います。亡くなる最後の十年は再び東京に戻り、私と一緒に暮らしました。

その他、千里山第二小学校で同級だった堀口君や内田君がこの十年の間に帰らぬ人になりました。堀口君とは一年生から三年生まで、内田君とは四年生から六年生まで一緒でした。

一方、私には三人の子供がおりますが（男―女―男），それぞれ社会に巣立ち、上二人は既に結婚し子供がおります。つまり私の孫ということになります。娘一家と一緒に暮らしていたのですが、今年の三月に婿が大阪に転勤となりました。ただ、娘は七月に二人目の出産予定なので大阪に移るのはこの秋となります。

母が亡くなる半年間という短い間ではありましたが、母―我々夫婦―娘夫婦―孫の四世代が一つ屋根の下に暮らしました。その娘一家の大阪での新居は服部緑地公園で、ここは私の第一期後半からの遊び場の一つでもありました。再び、千里山と繋がりができたことになり、孫をナオミ幼稚園に入れたいなどと言っているのを聞くと何か因縁めいたものを感じます。

### 会社人間バイバイ

仕事はもとより、飲むのもゴルフもいつも同じ会社の仲間という典型的会社人間であった私も、四〇台半ばより次第に高校や中学校の同窓会が始まり、十年前には千里山会が加わりました。

さらに、隣に住む方でも別の場所で会えば判別できないほど近所との付き合いがなかった私も、引き取った母がいつ一人で出かけ転んだりしてご近所の方の世話になるかもしれない、一緒に暮らす娘一家の孫もいずれ近所の世話になると思い、地元自治会の防災・防犯委員を引き受けました。お陰で今では見知らない方でも近所で会えば挨拶し、防犯パトロール仲間とゴルフをしたり飲んだりしております。

これらの集まりは今のところその実施頻度が増えこそすれ、減る傾向にあるものはなく、仕事などしている暇もないほどです。

## これからの十年

この十年があっという間に過ぎ去ったように、これからの十年も瞬く間に経ってしまうのでしょう。でも先を読むのには十年ぐらいが丁度いいような気がします。それ以上だと、千里山会にしろ、私自身のことにしろ、解らない・無意味な気がします。勿論、十年以内のことだって、読みどおりに推移するかどうかは解りませんが。

私は己が可愛そうになるほどあらゆるものにセンスや才能のない男です。音楽、美術はもとより、語学、ずっと続けていたスポーツ面でも同じです。私が唯一自慢できるのは起きて直ぐにでもビフテキを食べることが出来る胃袋と生来のオメデタイ性格です。私だって六四年の人生では、仕事の面やプライベートの面で騙されたり裏切られた経験は人並みに持っております。それでも未だオメデタサは一向改まってはおりません。鈍感力の才能は持ち合わせているのでしょうか？ もし死ぬまでこのオメデタサが続けば、それはそれで幸せな人世なのかな？と思います。

現在、私は千里山会総会時に司会をしているだけで、

総会開催の段取りや会誌編纂については、全く何もしておりません。柿崎さんや奥田さんをはじめとした幹事さんに負うところ大です。私ももう少し千里山会のためにお手伝いしなければと反省しております。素晴らしい千里山会を維持し、諸先輩のような溌剌とした将来を期待したいと思います。

千里山会及び皆様の、まずこれからの十年のご健勝を願ってこの文を終ります。